

副田義也社会学作品集
第Ⅱ卷

死者との
つながり

東信堂

副田義也社会学作品集 刊行にあたって

社会学研究者として、私は、半世紀余を暮らしてきた。そのあいだ、ほぼ休みなく、かきつづけてきた作品の主要なものをつかつて、全十二巻の作品集をつくらうとしている。主題ごとに関心をひかれるままに作品を配置して、自作について気付いたことがある。二つの作品系列がある。

第一の系列は、死、老年と老化、子どもと若者、性愛、マス・カルチャーなどを主題とする。これらの作品群を執筆したさいの自らの心理をふりかえると、自己表現の性格が相対的につよかったのに気付かされる。それを否応なく認めさせられたのは、各論の巻頭に『死者とのつながり』『老いとはなにか』を置く心の動きが、その処置が終るまで、きわめて自然に感じられていたということによる。私は八十二歳、近づいてくる死と進んでゆく老いを自覚しつつ、日々を生きている。

第二の系列は、日本文化、教育、福祉、政治などを主題とする。これらの作品群を執筆したさいの主要な動機のひとつは、社会の変動する歴史を観察して、その変動の機序を理解したいということであった。ここでの歴史はせんじつめれば他者といってもよい。この系列のなかに『日本文化試論』や『教育勅語の社会史』を置いた。私は、敗戦を国民学校五年生でむかえ、大学の教員を生涯の仕事とした。私にとって、歴史と政治とは、ときに知恵のひらめきが織りこまれる愚行の連鎖であった。

しかし、あらためていうまでもないが、これらの系列の区別は絶対的なものではない。自己の表現は歴史の文脈をおしておこなわれ、歴史の理解は自己の形態を媒体としておこなわれる。社会学において、自己表現と歴史理解は相互浸透している。社会学者たちは、研究の現場において自己と歴史の双方にみいる二正面作戦をたたかわねばならない。社会学のこの半世紀あまりの変容をふまえて、新しい方法の出現として、社会学宣言と社会学革命を唱える。そこに社会学のほかの社会科学と区別される独自の性格がみいだされるといいきり、仕事はじめの挨拶とする。

目次

副田義也社会学作品集 刊行にあたって i

1 死者とのつながり…………… 3

1	作田啓一氏の質問	4
2	死者との連帯	5
3	祖霊による守護	10
4	怨霊と御霊	14
5	殉死	18
6	靖国神社	22
7	死者とのつながりの四類型	26
8	昭和文学(1)	29
9	昭和文学(2)	36
10	昭和文学(3)	41
11	昭和文学(4)	45
12	おわりに	51
注		55

2 死者に語る——弔辞の社会学……………59

はじめに——意図と方法 60

第一章 弔辞とはなにか……………63

死者に語る言葉 63

許されない弔辞 66

許される弔辞 68

カトリック教会のばあい 70

キリスト教文化圏にみいだされる弔辞 74

故人への讃辞 76

ユダヤ教の葬儀 79

イスラム文化圏の葬儀 81

仏教文化圏の葬儀 83

儒教文化圏にみいだされる弔辞 85

儒教の死生観、靈魂観 88

日本人の靈魂観 90

小結と補足 94

注 95

第二章 政治家の弔辞——中曽根康弘から故岸信介へ／江田三郎から故浅沼稻次郎へ……99

歴史に残る作品 99

永訣という言葉 103

弔辞は短い伝記である 105

弔辞は短い現代史である 108

自己表現としての弔辞 112

暗殺された政治家への弔辞 113

語られすぎたテロル 117

米国は日中共同の敵 119

社会主義思想の破産 123

大衆政治家のイメージ 126

弔辞は作品である 129

池田勇人の浅沼追悼演説 130

言葉の戦い 133

注 134

第三章 社葬における弔辞——谷井昭雄から故松下幸之助へ……137

社葬のクライマックス 137

三万人の参列者 140

成功物語を避けて 144

第四章 キリスト教知識人の弔辞——南原繁のばあい

170

カリスマのイメージ	146
もうひとつの松下幸之助像	148
高度成長期の企業家	150
五人抜きの大抜擢人事	152
松下電器の大企業病	154
山下革命	157
事業部制の否定	158
沈黙の理由	161
後継者の自己主張	163
会社教のマニフェスト	165
注	167
二篇の弔辞	170
南原の信仰の日本的性格	174
天国のイメージ	175
「聖書」の「天の国」思想	178
自死した同僚への弔辞	180
軍国主義への批判	183
矢内原忠雄への弔辞	186
矢内原忠雄小論	190
矢内原の信仰の本質	193

終章

もう一度、弔辞とはなにか

.....

240

注	237
戦争体験の構造	235
東アジアのなかの日本	231
幻想世界から現実世界へ	228
「夏の花」	226
象徴的殉死	223
「美しき死の岸に」	220
死の世界への惑溺	218
死によって生きる	215
原民喜の自死	213
原子爆弾による被爆体験	211

第五章 文学者の弔辞——近代文学同人から故原民喜へ

.....

211

現代史の預言者	195
田中耕太郎への弔辞	197
「世界法の理論」	201
語られなかったこと三つ	202
大学の自治をめぐる	204
弔辞の背後のドラマ	206
注	208

歴史における死者との対話	240
日常生活の弔辞文化	244
私の弔辞体験	248
新書版のあとがき	252

3

自死遺児について・再考……………

255

はじめに	256
1 年間に出現する自死遺児数の推計	258
2 自死遺児の全数の推計	264
3 社会問題としての自死遺児	268
4 自死遺児の社会心理	276
注	284

4

震災死体験の癒しの過程における「重要な他者」と「一般的他者」

285

はじめに	286
1 死別体験	287
2 死者とのコミュニケーション	291
3 愛と悲しみ、怒り	297
4 宗教と自然	302
5 レインボー・ハウス	307

5 不安論ノート……………315

注 おわりに 312
314

- 1 生、死、不安 316
- 2 意志の敗北、断絶と孤独 320
- 3 創造的行為の推進力 325
- 4 真実なもの、重要なもの 331
- 5 子どもの不安 335
- 注 340

6 死の社会学の全体構想 343

- はしがき 344
- 1 私の研究経験から 345
- 2 主要な課題と留意点 348

- あとがき 355
- 著者紹介(一) 359
- 事項索引 364
- 人名索引 366